[複式みらい 実践例1]

第1・2学年みらいにおける「意味と内容」のひろがり

1・2年F組 松尾 浩一

～題材「のりものたんけんたい」の学習をとおして～

1 子どもに対するねがいと学習指導のねらい

本校の子どものうち、7～8割の子どもは、電車やバスという公共交通機関を利用して登下校している。このことは、公立校にはみられない現象である。朝のラッシュ時にサラリーマンや高校生に混じって電車やバスに乗り継ぎ登校する子どもの姿は、逞しくさえ感じる時がある。本学級の子どもも16名のうちバス利用者が15名、電車も利用する児童が4名であり、徒歩のみで登校する子どもは1名にすぎない。今回、公共交通機関を取り上げて学習することにより、毎日何気なく利用している電車やバスの様子やその仕事に携わる人に子ども達が目を向け、それを窓口として社会の仕組みの一端に触れて行ければいいと考えている。また、この学習を通して、のりものに興味や愛着をもち、楽しみながら学習を進めてほしいと願っている。子ども達は、毎日のようにバスを利用しているために、大人以上にバスの仕組みについてよく知っている。しかし、一つ一つのことを知っているだけであり、それがどんな工夫になったり、利用者の利便性や安全性に繋がっているのか等には気づいていない。また、バスの運転手の仕事は知っていても、その仕事の苦労には思い至っていない。低学年の子どもに上記の内容を理解させることだけが、今回の主眼ではないが、「そうだったのか。」や「なるほど。」と子どもの心に落ちたり、個々バラバラに見える事象が線や面として繋がってくることに気づいたりすることは、学習の一つの大切な要素である。そのような学習を展開するためには、題材や課題が子どもにとって切実感のあるものでなくてはならない。電車やバスがあるから毎日登下校できるという附属小学校の子どもにとっての現実は、切実感のある学習を可能にする条件を備えていると考えている。

1学期は、和歌山市の二大ターミナルの1つである南海和歌山市駅を取り上げて学習した。駅の施設や駅附属の百貨店を見学し、そこから見つけた課題を話し合ったり、見学内容をまとめて発表したりした。見学時には、インタビューしたり、聞き取ったことをメモしたり等の活動を行った。

2学期は、和歌山バスを取り上げた。電車と違いバスは、運転手さんの様子も間近に観察できるため、バスの車内の様子を出し合うことから学習が始まった。さらに、営業所にも2回見学に行き、疑問点を質問したり、整備工場での仕事の様子も見せてもらった。また、県庁前と真砂町のバス停でお客さんにアンケートをし、利用者の立場からも学習を行った。

本校の「みらい学習表」に準拠し、また上記の意図を考慮して次のような単元目標を設定した。

○乗り物をとりまく様々なことがらに興味・関心をもち、社会のしくみや働く人の思いにせまることができる。
○人の働きや施設等をかかわりの中で考え、気づきや共感、納得等の思いを通して、思考力を育む。
○みんなで考えたり、活動することに価値や喜びを見出し、学習を楽しむことができるとともに、自分の生活に自信やはりをもち、意欲的に生きようとする気持ちや態度を育む。

さらに複式学級という観点から、学び方や子ども相互の関わり方として次の目標を設定した。

○自分の思いや考えを素直に表現したり、友達の意見をよく聞いたりしながら、主体的に学習を進めようとする。

2　1年生と2年生の子どもがとらえた「意味と内容」

「意味と内容」をみらいという教科の面と複式学級という学級の特性の面に分けて考えてみる。

また子どもの発達段階も1 年生と2 年生ではかなりの開きがあるので、そのことも認識しながら考えてみたい。

①みらいの学習における「意味と内容」

みらいの学習では、社会事象をまるごと題材とする場合が多い。今回の題材でも、見学に行けばいろいろなものを見、聞き、体感してくるわけである。しかし、そのままでは、整理もされていないわけであり「意味や内容」がごちゃごちゃに放り込まれた状態であるとも言える。そこで、子どもの思いを丹念に見取り、それをもとに、学習課題を設定していくことが、指導者の役割となる。みらいの学習は、国語や算数と違い単元が一年間続くために課題や題材が変化していくという側面もある。今回の学習でも題材が市駅からバスに変わったのであるから、当然課題も変わっていく。その中で、公共交通機関の様々な施設は、それぞれ利用者の利便性を考えたものであることに気づいたり、乗り物に携わる人が、利用者のことを考えて働いていることに気づいたりすることが、「意味」の獲得になると考える。またそのために考えた課題を「内容」と捉えたい。

1年生と2年生を比べると、1年生は視野も狭く、また表現力も2年生程には身に付いていない。1年生の中には、どう表現すればいいのか、何を考えればいいのか、と難しさを感じている子どももいると考えられる。指導者が1年生と2年生のどちらに足場を置いて学習していくのかが迷うところである。しかし、1年生も2年生の学習の様子を手本として、徐々に学び方がわかり表現力がついてくることも事実である。

②複式学級における「意味と内容」

複式学級としての「意味と内容」は、学び方の面から捉えている。教科提案にも記述しているように、「意味」は子ども同士のかかわりと考えている。また「内容」は、自分達で学習を進めるガイド学習そのものである。みらいの学習においては、子ども達が自然に自分の思いを出せる表現力をつけることがまず大切になってくる。朝の会の日直のニュースをもとにいろいろなことをお尋ねしコミニュケーション力と話すことの楽しさを感じさせたいと考えている。また、まだまだ表現力の弱い低学年の子どもには、指導者の支援も欠かせないものである。ガイド学習は、算数・国語が中心でありみらいにおいては、一斉指導をとっているが、その中でも異学年がかかわりあう1年2年2人ずつ4人でかかわりあうグループ学習や移動黒板を利用した同時間接指導も取り入れ、複式としての「内容」を念頭においた指導も試みている。

③学習計画（全136時間）　*1学期42時間・・・和歌山市駅を中心にして*

4月　バス・電車って・・・・お話ししよう。

5月　市駅探検パートⅠ　市駅のプラレール広場に遊びに行こう。

市駅探検パートⅡ　券売機　改札口　エスカレーター　駅の店舗

お気に入りを発表しよう。 絵に描いて　説明も入れて　お尋ねもするよ。

6月　市駅探検パートⅢ　改札を通ってプラットホームへ　市駅マップを作ろう　テーマソングを作ろう

7月　市駅探検パートⅣ　車椅子の人も電車にのれるか確かめよう。

市駅の学習を複式集会で発表しよう。

1学期の主な課題　改札のしくみ　裏が白いきっぷ　プラットホームのひみつ　車椅子対応等

2学期58時間・・・和歌山バスを中心にして

9月　バスに乗ってお店探検（教生先生のバイト先のうどん屋さんへ）

10月　バスの車内の様子について

運転手さんのまわり　出口と入口　座席　行き先表示　運賃箱等

11月　和歌山バス和歌浦営業所の見学パートⅠ

バスの車内のしくみを教えてもらおう。

バスの絵を描こう。和歌山バス・みらいのバス・観光バス等

県庁前と真砂町のバス停でお客さんにアンケートしよう。

12月　和歌山バス和歌浦営業所の見学パートⅡ

整備の人の仕事を中心に見学

2学期の主な課題　1つの席に二人すわれるのか。バスの車内でのマナー。運賃箱のお金はどうなるの。バスにきれいな絵があるのはどうして。お年寄りのお客が多いのはなぜ。運転手さんと整備の人とどっちがたいへん。等

以上1学期と2学期は実践済みの内容

3学期36時間・・・1学期と2学期の発展とまとめ

1月　和歌山バスのことをみんなに知らせよう。

営業所の様子　運転手さんの仕事　整備の人の仕事　バス停の様子等

2月　畑で育てた大根を市駅で販売しよう。

市駅のどこではんばいしたらいいかな？

売ってもいいのかな？　いくらにしようかな？　みんな買ってくれるかな？

もうけたお金の使い道を考えよう。

3月　「のりものたんけんたい」の紙芝居を作ろう。

3 「意味と内容」がひろがる場面

本校研究会当日の授業をもとにして、具体的に考えてみる。

この授業では、前半は異学年混合の2グループによる同時間接指導の形態をとった。本時の課題が「運転手さんと整備の人とどちらがたいへんか。」というテーマであつたので、運転手さんがたいへんのグループはその根拠を出し合う。また整備の人がたいへんのグループはその根拠を出し合う。このようにテーマをかえて異学年混合による同時間接指導のガイド学習を試みた。この場面では、複式学級としての「意味と内容のひろがり」を期待したわけである。子ども達はそれぞれのグループで下記のような意見を出した。

運転手がたいへんチーム	整備の人がたいへんチーム
・たくさんのボタンの操作を覚えなくてはいけない。 ・運転手さんは、信号が青の時しか休憩がない。 ・お客さんが多いとき、ドアを開けるボタンをずっと押しておかないといけない。 ・運転しながら、いろんなボタンを押さないといけない。 ・バスの走る道を覚えなくてはいけない。 ・（黒板に絵を描いて）バスカードを売るのがたいへ	・バスが壊れていないか調べる。 ・仕事が忙しくて休み時間が少ない。 ・バスが170台あるから、たいへん。 ・タイヤに空気を入れたり、オイルを入れるのがたいへん。 ・整備の仕事をしている人が11人しかいない。 ・道具がいっぱいあって使い方を覚えるのがたいへん。

ん。 ・降りるお客さんが多いとき、バスカードのボタンを押さないといけない。 ・服装でネクタイとかしめなくちゃいけない。	・油でよごれるから、手袋とかしないといけない。

このように2つのグループがそれぞれに仕事の大変なわけを具体的に出し合うことができた。

この後、机を前向きに合わせて一斉指導の形態に変えた。それぞれのグループから出された根拠をもとに思考を深めることと、和歌山バスで働く人は、利用者のことを考えて仕事をしていることに気づいてほしいと願ったからである。話し合いを始めると、運転手グループの子どもの中にも「整備の人は首が痛い。」とか「重い物を持つからたいへん。」等それぞれの仕事にどちらにもたいへんなことがあることに気づき始めた。この子ども達にとってはここで意味がひろがったと捉えたい。さらに、「運転手さんは、よく見てないとあかん。」という意見が出た。ここで指導者が『運転手さんは何を見ているの。』と問いかけてみた。この発言と発問を契機として、運転手さんが運転しながら耐えずお客さんのことを気遣っていることに気づき始めた。そして、お客さんの様子を知る道具としての鏡の役割の大切さにも気づいていったわけである。また、なぜお客さんを気遣うのかというと、お客さんの安全への配慮であるということにも気づいた。マイクで『バスが止まるまでお待ち下さい。』とアナウンスしたり、バスの入口でお客さんがドアに挟まらないか鏡で確認したり等の具体的な形で安全ということを理解することもできたようである。そこで、『じゃあ、整備の人はお客さんの安全を考えていないのかな。』と発問してみた。すると、『バスが故障しないように、安全を考えている。』や『バスが走っている途中で故障したら、お客さんが事故にあって困る。』『整備の人はきちんと修理して、事故が起こらないようにしいてる。』『タイヤがパンクしないように空気を入れとかなあかん。』等の意見が出た。このように、この授業では、まずたいへんの中身を出し合うことから学習が始まり、どちらもたいへんな仕事であり、安全を守るかけがえのない仕事である。と気づいていったわけである。このような考えを具体化することや利用者の立場から考えられるように思考が広がったり、深まったりすることが「意味と内容のひろがり」と捉えたいと考えている。またまなざしの共有という視点から今回の授業を考えると、前半の移動黒板を利用した同時間接指導の場面において、子どもの発言を移動黒板にどうまとめようかと考えて書いたり、また黒板へのまとめ方についてグループのみんながアドバイスするような様子の中に複式学級の学び方におけるまなざしの共有を感じる。

4 成果と課題

４月からの実践を振り返って今一番感じていることは、乗り物を通して社会の仕組に触れさせることの難しさである。特に１年生には難しい学習を強いたような反省がある。もっと遊びや五感を取り入れたような学習展開を考える余地があったのではないかと考えている。２年生になるとかなり視野も広がり社会性も身に付いてくるために、自然な形で学習に参加できていたように感じられる。しかし、子どもはそれぞれに自分の力を出し題材に主体的にかかわっていた。そして、成就感や自信を持つこともできたようである。

次に子どものみとりについて考えてみる。低学年の子どもは、まだまだ揺れ動いていて、自分の考えをしっかりもったり、みんなに伝えたりする力は弱い。そこで、子どもの活動の様子やしぐさ、つぶやき・表情等から子どものこだわりや思いをみとっていかなくてはならない。授業において「意味と内容」がひろがるかどうかは、子どものみとりにかかっているといっても過言ではないと考えている。